

ウクライナ——チャイコフスキーと音楽家たち

吉田英生 (S53/1978卒)

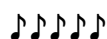
2022年2月24日、ロシアのウクライナ侵攻が始まり、ショッキングな映像が毎日のニュースで流れています。筆者は夢想だにしなかったこの憂うべき現実に向き、自分にできることは（若干の募金を除けば）ほとんどありませんが、侵攻とは直接関係ないもののウクライナとロシアに思いをはせる話題——できれば少しでも光を見出せる方向の話題を提供できないかと考えました。加えて、同窓会報として楽しくのどかな雰囲気満ちた京機短信中にも、東西冷戦が終結したはずだった21世紀の歴史に刻まれるべきこの重大な出来事的一端、すなわちキーワードとしての「ウクライナ」を、何らかの形で残しておけないだろうか。

筆者が今回の事件にことさら胸を痛めるのには、個人的な事情も重なっています。ウクライナの北側に接するベラルーシには、The A.V. Luikov Heat and Mass Transfer Institute という熱工学関係では世界的に有名な研究所があります。このメンバーとは30年以上前から国際共同研究をしてきて、その中でも一番親しい友人がウクライナ出身なのです。その友人と2月中旬にメール交信したとき、肝心の部分については「今は何も言えない」とだけ短く返信してきたに過ぎませんでした。彼の心中、察するに余りあり、こちらからかける言葉もみつかりません。

ウクライナについては、筆者は侵攻後に遅ればせながら

- (1) 黒川祐次 (元駐ウクライナ・モルドバ大使、キーウ国際大学名誉教授)、「物語 ウクライナの歴史 ヨーロッパ最後の大国」、中公新書 (2002)
- (2) 服部倫卓・原田義也 編著、「ウクライナを知るための65章」、明石書店 (2018) (黒川氏も3章分を執筆)

を中心に何冊かの本でにわかに勉強したに過ぎません。2002年に出版された黒川氏の本は読まれた方も多いことと思いますが、周辺民族・諸国との係争が絶えず複雑きわまりないウクライナの歴史がとても分かりやすく興味深く書かれていますね。その第八章（最終章）のタイトルは「三五〇年待った独立」となっていて、これは1991年8月24日のソ連からの独立を指しています。それから31年後の現在の状況を考えると、なんともやり切れない思いです。



3月16日朝、日本経済新聞のコラム「春秋」から以下の文章が目飛び込んできて、ハッとしました。

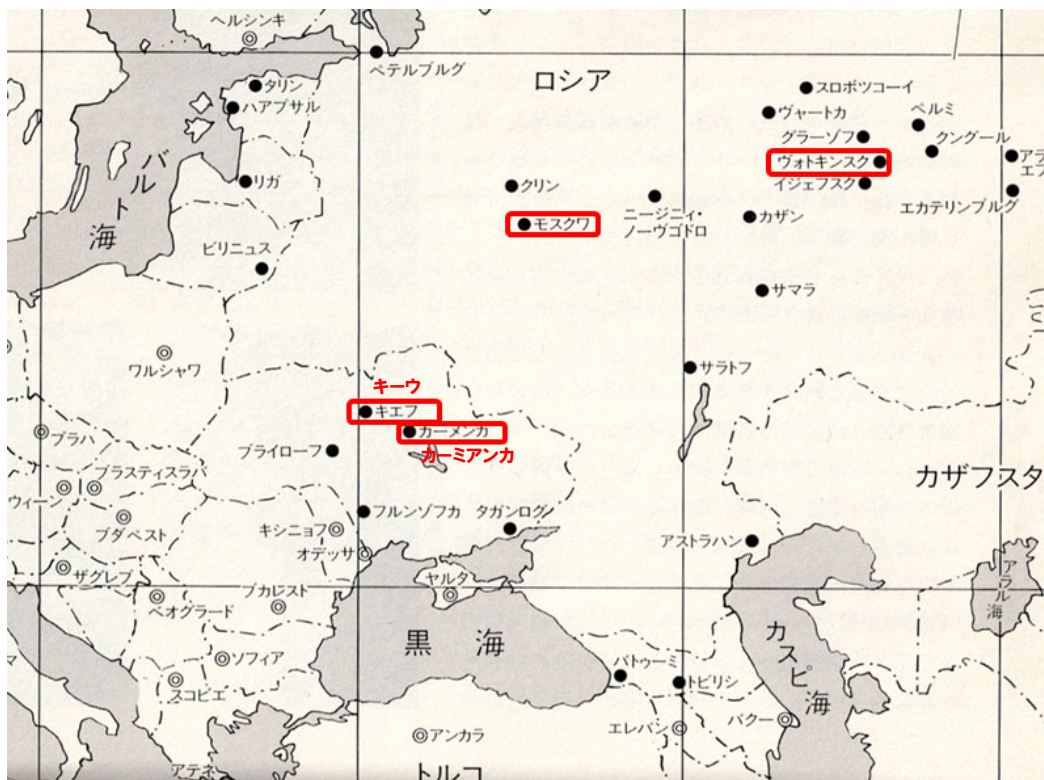
「かもめ」を意味するロシア語、チャイカはウクライナの伝統的な名字でもあるらしい。19世紀後半に交響曲やバレエ音楽などの傑作を世に送り出したチャイコフスキーの祖父も、この地の出身でチャイカから改名した。自治的な戦士集団コサックの一員だったそうだ。

春秋子もまた前述の黒川氏の本などを参照されて執筆されたようですが、ピョートル・チャイコフスキー（1840–1893）が生きた19世紀、ウクライナはロシア帝国の地方の一つとして小ロシア（マロロシア）と呼ばれました。そういえばチャイコフスキーの交響曲第2番は「小ロシア」あるいは「ウクライナ」の副題で知られています。そこで、さらに

- (3) 寺西春雄他、「作曲家別名曲解説ライブラリー⑧チャイコフスキー」、音楽之友社（1993）
- (4) 森田稔、「新チャイコフスキー考 没後100年によせて」、NHK出版（1993）
- (5) 池辺晋一郎、「チャイコフスキーの音符たち」、音楽之友社（2014）
- (6) 小松佑子、「チャイコフスキー伝 上巻・下巻」、文芸社（2017）
- (7) ひのまどか、「音楽家の伝記 はじめに読む1冊 チャイコフスキー」、ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス（2020）

などで、チャイコフスキーとウクライナの接点を調べてみました。チャイコフスキー自身はウラル山脈の西側にあるヴォトキンスクで生まれましたが、2歳年下の妹のアレクサンドラが1860年にダヴィドフ家に嫁いで住んでいたウクライナのカーミアンカ（ロシア語ではカーメンカ）が気に入り、1870年代には毎年のように滞在したそうです。チャイコフスキーは以下のように書いています。

私はカーメンカの家にある過去を愛する。この家は詩的インスピレーションを掻(か)き立てる。プーシキンの姿が舞い上がる。……カーメンカではモスクワやペテルブルグでは探しても得られなかった心の平和を得た。（(1) p. 140より）



チャイコフスキー関連地図（(4)より）

このカーミアンカでチャイコフスキーはウクライナの民謡に接したことで、それらがチャイコフスキーの楽曲に反映していることを遅ればせながら知りました。以下、(3)から緑字で引用させていただきます（譜例を除いた抜粋引用のため、原文とは若干異っています）。

交響曲第2番

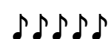
まず、前述の交響曲第2番が作曲されたのは1872年です。第1楽章の序奏から、尾をひいてホルンが悠然と吹く主題は、ロシア民謡《母なるヴォルガを下りて》が、ウクライナ風に変形されたもので、この第1楽章の第2主題としても重要な役割を演ずる (p. 25)。また、第4楽章で、ティンパニの強打で序奏が終わると全休止がきて、やがてアレグロ・ヴィーヴォの主部となり、静かにヴァイオリンが主要主題を奏しはじめる。この主題はウクライナ民謡《ジュラーペリ(鶴)》であり、この楽章を一貫してこの旋律は用いられる (p. 27)。交響曲第2番には、これらの民謡を取り入れたことで、副題の「小ロシア」あるいは「ウクライナ」が付けられました。

ピアノ協奏曲第1番

一方、古今のピアノ協奏曲の中でも最も有名なピアノ協奏曲第1番は1874年から75年にかけて作曲されました。第1楽章で、冒頭の4分の3拍子から4分の4拍子に移った主部で、第1主題は彼がカーミアンカ滞在中にスケッチしたウクライナ民謡をリズム変化させたもの。後にやはりオクターヴで再現する旋律の方が原曲に近い (p. 163)。また、第3楽章で、軽妙な第1主題はウクライナの民謡ヴェスニャンカ(筆者注:「ウクライナのハラポート」ともいう曲名)のひとつ《さあ、イヴァンカ、おいで》による (pp. 164-165)。

このピアノ協奏曲第1番は、筆者もおそらく何百回と聴いて、もちろん感動は覚えていましたが、その背景については何も知りませんでした。やはり作曲の背景もしっかり理解して鑑賞すべきですね。「ポーっと聴いてんじゃねーよ！」と叱られても仕方ありません。

このチャイコフスキーの例からも理解できるように、ウクライナとロシアは、歴史的には係争も絶えなかったものの、本来は同じスラブ系民族として親近性もあり、もともと明確な境界線を引くのが難しい関係です。その両国がこのような悲惨な戦争を行っているのは本当に堪えがたいことです。



次いで、ウクライナが輩出した音楽関係者を見てみます ((1) pp. 164-166)。まず思い浮かぶのは映画あるいはミュージカルで有名な「屋根の上のヴァイオリ

ン弾き」ですが、原作は

・ショーレム・アレイヘム（1859–1916）

で、短編小説の原題は「牛乳売りテヴィエ」。19世紀末の南ウクライナ（アナテフカ Anatevka 村、架空の地名）が舞台でした。

京機短信 No. 363 でも紹介した朝比奈さんの先生だった指揮者

・エマヌエル・メッテル（1878–1941）

も、やはりウクライナ出身でした。また、20世紀の大作曲家

・セルゲイ・プロコフィエフ（1891–1953）

はピアニスト・指揮者でもありました。

一方、20世紀に活躍したヴィルトゥオーソは目白押しです。以下は生誕順で、まばゆい限りです。

・グレゴール・ピアティゴルスキー（1903–76）

・ウラディミール・ホロヴィッツ（1903–89）

・ナタン・ミルスタイン（1904–92）

・ダヴィッド・オイストラッフ（1908–74）

・スヴァトスラフ・リヒテル（1915–97）

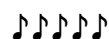
・エミール・ギレリス（1916–85）

・アイザック・スターン（1920–2001）

・レオニード・コーガン（1924–1982）

などです。なお、ロシア系ではありますが、ヤッシャ・ハイフェッツ（1901–87）

はリトアニア出身、ルドルフ・ゼルキン（1903–1991）はボヘミア出身、ムステイスラフ・ロストロポーヴィチ（1927–2007）はアゼルバイジャン出身です。



チャイコフスキーが53歳で亡くなる2ヶ月ほど前に完成させた交響曲第6番「悲愴」。その完成大詰めの際に以下のように語ったそうです。

この作品だけは、わたしは文句なしに愛せる、ここにはわたしのすべてがある。わたしは弱い人間だが、弱いからこそ人の世の苦しみや悲しみを真剣に受け止め、それを芸術に昇華することができる。その芸術によって人々をなぐさめることができる。同じ悩みを抱える者がいると知れば、人は自分の運命にも耐えることができるだろう。この交響曲はわたしの魂のもっとも正直な告白だ。わたしの心の底からの叫びだ。これにこたえてくれる人々は、わたしと手を取り合って泣こうではないか。（(7) p. 226）

筆者は、交響曲の中ではテンションが上がる第4番や第5番をつい聴きたくなり、逆に沈み込んでいく第6番はほとんど聴くこともありませんでした（正直なところ聴く気になれませんでした）。しかし、ウクライナ・ロシア両国民だけでなく世界中が苦しみ悲しみにある中、この言葉を胸に聴き直しているところです。

（2022年3月26日記、31日「キエフ」を「キーウ」、「カーメンカ」を「カーミアンカ」に一部修正）